退魔メイド 薫の危機

新居佑

表紙イラスト：恋河こノル

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『退魔メイド薫の危機』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

退魔メイド 薫の危機

新居 佑

表紙／恋河ミノル

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

薫（かおる）

その強さは他を圧倒し、伝説と語り継がれる女退魔師。ある事情により、某資産家のもとで一メイドとして仕えている。

タクヤ

薫が働いている資産家の息子。異形の化け物に憑かれやすい体質。

ディーオ

薫が扱う使い魔。立派なたてがみの大型犬。

「ほら、起きてください。もうこんな時間ですよ」
凛とした、それでいて甘くどこか艶っぽい女の声が、朝日が眩しいとある部屋に響いた。
「う……ん……」
まるで天使の囁きのような艶やかなモーニングコールにも応じず、呼ばれた少年はきれいに整えられた自らのベッドの中で温かそうな布団にくるまったまま、かすかな寝息を吐いている。
「……あらあら、まったく世話がかかるご主人様ね」
短気な性格ならすぐさま布団を剥ぎ取るか、耳元でフライパンでも叩き鳴らす場面だが、悩ましい声の主は、少年の不遜な態を気にかけることなく、美声を発したふっくらとした唇をやんわりと微笑ませた。
女の華奢ですらりとした両腕が、部屋の窓にかけられた薄手の柔らかいカーテンを握る。そのまま両手を勢いよく、けれど優雅に大きく外側に開いた。
ジャッ、という歯切れのよい音と同時に、外界を照らす燦々(さんさん)とした陽光が、部屋の中へと存分に差し込まれた。
「さぁ、今日もこんなにいい天気ですよ。んん～、気持ちいい。ほぉら、早く起きてください、タクヤ様」
軽く伸びをしながら、女はベッドでモゾモゾと動いている自らの主の名を呼んだ。

平等、均等が声高に叫ばれる現在の世の中において、甘優しい声をかけられていまだに寝息を立てている少年を怒りもせずに〝様〟付けする彼女。

彼女の職業は、メイドである。

一見すると気の強そうに見える切れ長の黒い瞳と、そこに乗せられた半透明の眼鏡が、朝日に照らし出される彼女の凛とした顔立ちを、鮮やかに演出する。

年の頃は、二十歳にかかるかどうかといったところ。モデルのように背の高い、そして〝かなりグラマラスな〟肢体をスッと伸ばした立ち姿からは、狩り入れの最盛期を迎えた果実たちのように、触れれば蕩けそうな感触と、ズッシリとした確かな重量感が彼女の極わずかな動作からでもムンムンと漂ってくる。

悩ましいうなじを見せつけるようにして、長い黒髪をアップにまとめた女が纏っているのは、鮮やかな色合いを見せる濃い青のワンピース。そして皺ひとつない純白のエプロンだ。

手首まで締める袖口に、膝下までゆったりと伸びるフリフリのスカート。そして頭にちょこんと乗せたかわいらしいカチューシャは、彼女の柔和な物腰のイメージをそのまま体現したかのように、落ち着き払った、まさに安らぎの衣装である。

更に、はち切れんばかりに発達した悩ましすぎる女体のアピールポイントを一片たりとも打ち消すことなく、更なる艶やかさへと昇華させ協調している完璧なまでのメイドコスチュームだ。

「んん……ふぁぁ……まだあと五分だけ……寝かせてよ、薫……ごめん……むにゃ……」

薫、少年があくび越しに呟いたのが、この家のメイドたる彼女の名前だ。

そして彼女の目の前の少年の名はタクヤ。明らかに男の名前で実際そうであるのだが、布団を被ってすやすやと二度寝している少年の顔は、少年というよりはちょっとかわいい女の子といった感じだ。

「そんな……タクヤ様、さっきもそう言ったばかりじゃないですか……」

眩しい陽光、鈴の音のような優しい声。それらすべてを無視して眠りにふけるタクヤ少年の専属メイドである薫は、ご主人の〝あと五分〟口撃に困惑したような表情を、その美しい顔立ちに浮かべた。

おそらく、このまま頼みを聞いても五分後にベッドから出てきて「おはよう、薫！」などと爽やかな挨拶を聞ける可能性はほとんどないだろう。

それはわかっている。二度寝が健康上よくないことも、このままではご主人様が学校に遅刻してしまうこともはっきりしていた。

（もう、わがままなんだから……）

思わず軽い溜め息を吐いてしまう。

（まったく、しょうがないわねぇ……）

けれど心ではそんなことを思っても、彼女の顔から微笑が消えることはなかった。

彼女はご主人様にご奉仕するのが生き甲斐なのだ。これくらいで諦めていては、メイドの名折れというものだ。

「ねぇ、タクヤ様。起きてくださいってば……」

「ん……なんだよ、薫ぅ……あと五分って言ったじゃない……ムニュ！」

ムニュッ……!?

そんな、なんとも柔らかい、まるで巨大なマシュマロかなにかを触ったときのような感触が、少年の頬を包み込んだ。

「んんんんっっ!?　んむんむ……ぅぅっっ！」

「どうですか、タクヤ様。目が覚めました？　あんっ、そんな……あんまり顔を揺すらないでください……」

悩ましげな女の声が、少年の耳の近くで囁かれる。顔を包むのは圧倒的な柔らかさ。顔を動かすたびにムニュムニュ、モミモミと自在に形を変えて少年の感覚を刺激する肉脂肪の温かさ。

「うぇぇっっ!?　な、なに……!?」

突然の感触に少年の意識が一気に覚醒へと向かう。瞳を開ければ、そこに見えたのは、艶っぽくこちらを見つめているメイドさんの黒い瞳と、白いエプロンで包まれてなお少しもボリュームを落としていない二つの豊満な柔肉だ。

「おはようございます、タクヤ様」
「う、うあああああっっっっ！」
ガバッッッッ！　と、まるで非常サイレンを聞いた泊り込みレスキュー隊員のように、少年の小柄な身体が飛び起きた。
いまだかすかに頬に残る生暖かくてムニュリと感触は、男ならずっと感じていたい女の柔肌のぬくもりだ。
けれどタクヤ少年は年齢はそれなりなのだが、〝こっち方面〟はまだまだお子様だった。
少年は、大の男が軽く川の字で熟睡できるほどの巨大ベッドの上に立つと、まるで少女のように華奢な身体を震わせながら叫んだ。
「な、なにやってるんだよ、薫！　そそそそんな起こし方……僕は教えた覚えはありませんんっっっ！」
ビシィィッッ！　と人差し指で、目の前のメイドさんを指差す少年。息が上がっており、頬が赤い。
「申し訳ありません、タクヤ様。でも、タクヤ様が悪いんですよ。あと五分なんて言って、いっつもギリギリになっちゃうんですから。どうです、すっきりはっきり目が覚めたでしょう？　うふふ、よかったです。タクヤ様のお顔が、私の胸の谷間にピッタリで……」
寝起きだというのにやたらとハイテンションなご主人様を見上げながら、黒髪の女は、

言葉とは裏腹に、さっきまで凛々しい顔つきだった退魔メイドの額には、大粒の汗が浮かんでいた。

吊り上げられた眉根も、いつの間にか垂れ下がり、はぁはぁと息をする唇の端からは、ツゥーと半透明の粘ついた液体が糸を引いている。

（こんな……揉まれてるだけなのに、どうして……身体が、アソコが燃えてしまうのぉ!?）

薫は股間からジンジン響く甘い感覚を必死に堪えながら、少し昔のことを思い出していた。

あの日、退魔師として飛ぶ鳥を落とす勢いだった薫は、人生初めての敗北を喫し、そして堕ちてしまった。守るべき仲間の窮地を見捨てて――。

その相手こそが目の前のネルーヒだ。結果としてなんとか勝利を収めた後、タクヤと出会い、自らの行く道を決めた。そして誓ったのだ。もう快楽には屈しまい、と。

なのに――。

「はぁぅ、やめ……やめぇ……っっ。くぅっ、胸を、揉むの……ひぐっ、やめなさ……あああっっ！　ああ、そこ……そこぉおおっっ！」

「ココがいいのか？　変わってないな。ん？　乳輪が濃くなってるな。誰かに揉んでもらったか？　それとも自分でか!?」

えっちシーン試読版 ピンクのページ！

影となった男が、背後から絡みつくようにして、薫の成熟した色香を満喫していく。
キュンッと色っぽく反り返った背筋に比例して、たわわに実った乳房が白いエプロンとともにユサユサと揺れる。
根元から乳首までギチギチに締めつけられた豊満な膨らみが、まるで出荷直前のボンレスハムのようにピチピチに弾け、まったりとした輪郭をねっとりとした汗がじっくりと滑り落ちていく。
「くはぅっ……ダメ……ジンジンくる……っっ。乳首ぃ、くぅっ、あなたなんかに……こんな好き勝手……おおっっ、ひぐ……悔し……んあああっっ！」
ただ弄ばれる堪らない屈辱に、心は抵抗しても熟した肉体はそうはいかない。
もう辛抱堪らないという風に、腰がクネクネと動き、男を誘う卑猥なダンスを踊る。頬が上気するほどに赤らみ、必死に堪えながらも漏れ出す声には隠しとおせない濃い艶が滲んでいる。
（あああ、熱い……アソコがジュクジュクしてきて……ふうんんっっ、わ、私……乳首だけでまた……くぅっ、もうあんなことには……ひぎぃぃっっ！）
まるで露出が趣味の女のように短くなったスカートの奥では、ギチッとお尻に食い込んだガーターベルトと色っぽいショーツがジュンッという音が聞こえるかのように、半透明の染みを作っていた。

もう全身の穴という穴から立ちこめる淫靡な牝の臭いを止めるなどできなかった。メイド服に包まれた身体中が内側から沸騰し、耐え難い甘い痺れを延々と発し続けている。

「おっ、胸に張りが出てきたな。ククッ、覚えているよな？　俺が仕込んだ快感でよがり狂ったあのときのお前自身を？　少しは我慢強くなったのか試させてもらおうか⁉　ケヒャヒャ」

「い、いつまでもくだらないことを言ってなさい。あふっ……私はもうあのときのように……屈しはしないわ！」

「ヒャハ、きついなぁ。やっぱりお前は最高だ。じゃあ、存分に楽しませてもらおうか⁉」

ギチュルッッ！

タプンタプンと揺れる乳房に巻きついた触手コードが、一斉に蠢き脈動する。甘い果実に走る淫らな神経を隙間なく刺激するように、おぞましい触手たちがウネウネと動きながら絶妙の力加減でメイドの肉房を弄ぶ。

「ひぐぅぅっっ！　おおっっ、し、締まるぅぅっっ！　む、胸ぇぇっっ！　シビシビしてぇ……くっ、こんな、こんな感覚……ひ、く……ぅぅぅっっ！」

絶え間ない快楽パルスの応酬に薫は懸命に耐え抜こうとした。細い喉をククッと仰け反らし、漏れ出る甘い喘ぎ声を防ごうと、震える唇を噛み締める。

なにかから逃れるように、アップにまとめられた髪の毛を左右に振って、かすれかけた瞳で憎き影の妖魔を睨みつける。

（ここで……ここで屈したら私は……また……っ。タ、タクヤ様を守らないと……私は負けては……あひぃぃぃぃっっっ！）

けれど、そんな彼女の強い意志も滾る肉欲の前では無意味だった。

「ひぃぃぃっっ！　いぎぃぃぃっっ！　おおおおっっ！　ダ……メぇぇ……で、出るぅっっ!?　んあああっっ！　漏れちゃう……んぎぃ、熱いのが……弾けるぅぅぅっっ！」

瞬間、薫の頭から使命も、そして恥じらいすらも吹き飛んだ。緊縛の熟した果実がブルンッと大きく震えたかと思うと、勃起し充血した小豆の先端からブシュゥッッ！　と白濁の熱い飛沫が迸った。

「ひおおぉぅぅっっ！　おひっ、ミ……ミルクぅぅっっ！　母乳出ちゃ……あおおっっっ！　き、気持ちイイ……っっ！　わらひ、イクっっ！　ミルク搾り出してイクゥゥゥッッ！」

「ケヒヒヒッッ！　出た出たっ！　出やがった！　相変わらず噴水みてぇな射乳だなぁっっ！　おお、おお～、なんだよそのアヘ顔は!?　まだ出したりないのか!?　それならいくらでも噴出しやがれよっ！」

「なっ……やめ……そんな無理……ひぐおおおおっっっ！　イクッッ！　こんな……ま

た⁉　おかしくな……ほおおおおうううっっ！」

ビブシャアアアッッ！　と、まるで壊れた蛇口のように白濁の淫乳がとめどなく溢れ出る。飛び散った濃い絞りたてミルクが、青のワンピースと純白のエプロンを熱く汚し、薫から退魔師としてだけでなく、メイドとしての誇りをも奪い去っていく。

「あああっっ！　ああああっっっ！　おおおおおおっっっ！　イクッッ！　出る！　胸ぇぇっ！　ミルク噴いちゃうぅっ！　気持ちイイッッ！　気持ちイイイィィッッ！　おおほぉぉっ、ミルクイクゥゥッッ！」

屈辱と羞恥が気高い自尊心の中で激しく揺れる。悔しくて、恥ずかしくて堪らない。けれど一度芽生えた牝の淫炎は、母性の象徴である二振りの巨乳を、破壊的なまでの悦楽発生器として作り変えてしまった。

女の絶頂へと続けざまに舞い上がらせる射乳淫獄の前に、緊縛されたセクシーな肢体が躍り狂う。

「はおおおっっっ！　ミルク止まらないっ！　くぅぅっ、止め……ああっ、もうイキたく……倒さなきゃ……んほおおおっっっ！　胸が噴火してるっっ！　ああっっ、も、もうっっ！　おかしくなるぅぅぅっっっ！」

頭の上で拘束された両手を支点にして、はち切れんばかりのコケティッシュな肉体がよがりまくっている。

少年に優しい穏やかな笑みを送っていた美貌が、眉根をハの字に下げて、涎を垂れ流しながら野太く喘ぐ牝のものへと変貌している。

ビンビンに張り詰めた肉脂肪は、いっこうに衰えることを知らない射乳絶頂を繰り返し、埃ひとつないほどにきれいだった食堂の、床はおろか壁面にまで濃いミルク色に染め上げている。

すらっとした肉体が悦楽痙攣に震えるたびに、グンッと突き出されたお尻がブルブルと震える。卑猥に破れたエプロンが淫靡感を醸し出し、極端に短くなったスカートの裾から覗くムチッとした太腿からは、成熟した女の花園から漏れ出した熱い蜜液がトロトロと伝い落ちていた。

「ハハハッ、胸だけでここまで乱れるなんてな。まったく弄り甲斐のある女だよ、薫ちゃんっ！」

「はぁっ、はぁぁっっ！　くぅっ、はぁ、ふぅぅっっ……」

実に十数分間にも及んだ連続射乳絶頂から、やっと逃れることができた。肩で大きく呼吸を整えながら、いっこうになくならない絶頂の余韻の中、それでも気丈な心は失ってはいなかった。

「はぁはぁ……女を勝手に改造して悦ぶなんて……こんなことで、くっ……私を玩具にしたつもりですか？　サドッ気だけじゃなくて、ナルシストの気まであるようですね？　妖

「んおおっっ！　そ、そこ……弱いんです……タクヤ様……んくっ、んああっっ！　か、感じすぎて……ぇぇっっ！　乳首がジュクジュクきちゃいます！　うぁ、あはぁぁっっ！　溶けるぅぅっっ！　タクヤ様におっぱい溶かされるますぅぅっっ！」

堪らないじれったさに苦悩する退魔メイドを更に追い詰めているのが、守るべきタクヤの上手すぎる淫技だった。

まだ事態の大半も呑み込めていないだろう少年は、ただわけもわからずにメイドの牝を貪り尽くしていた。

恐怖に急かされ、まだ[illegible]ながら自分を守ろうという胸に秘めた想いは、痛いほど伝わってくる。

けれど彼もまた牡なのだ。目の前に極上のメインディッシュを並べられて、ただ理性を保てるほど強くはない。いつの間にか女の感じるところを探り当て、むしゃぶりつくように、メイドの快楽神経を根こそぎ剥き出しにしていく。

「んじゅぱっっっ！　じゅるるっっ！　おいしいっっ！　おいしいよ、薫のおっぱい！　んんっっ、だから……ごめんっっ！　んじゅっ、ごめんよぉぉっっ！」

「ほおおおおっっ！　タクヤ様ぁ、私もごめんなさいぃっっ！　私が頼りない、んああぁっっ！　ために……こんなはしたないこと……ひぎぃぃぃっっ!?　う、うそ!?　もう出るっっ！　いや……もうっ！　また……イッックゥゥゥッッッ！」

ちょっと試し読み
ここからスタート！

ブシュ……ゥウッッッ。

「お、おおっ……ま、た寸止めぇぇっっ……あは、狂ってしまう……頭グズグズになって……あ、ああっっっ」

今にも泣き出しそうなくらい悲壮な表情で、二十一回目の射乳を止めた。もう本心は溜まりに溜まった悦楽に折れかかっている。

〝許してください〟〝イカせてください〟。前にネルーヒにそう懇願したように言えれば、どれだけラクだろう。

「ガキの吸いつきがヌルいなぁ。ケケケ、牝を弄るってのは、こうやるんだよ！」

ジュボボッッッ！　ギチルァァァッッ！

「ひぃっっ！　ひっ、ぎぃぃぃっっっっ！　あおおおっっ！　イ、イクッッッッ！　そんなぁぁっっ、お尻の穴もぉぉぉっっっっ⁉　んひおおおっっ！　ネ、ネルーヒ……っっ！　くっっ、い、いやぁっっっ！　奥まで抉られ……っっ！　はおおおおおっっっ！」

男根の形を模した極太触手コードが可憐な肉門を思いきりこじ開ける。寝転がった肢体がギュンッッと仰け反って、新たに目覚めた尻穴快感に震える。

ビビュルッッッ！

一瞬、牝果実がブルンッッとわななき、赤みを増した肉突起から、わずかに白い粘液が物欲しげに搾り出された。

「あ、あは……っっ！　はぁ、はぁ……んあああっっっ！」
（も、もう無理いいっっ！　イ、イキたいいいっっ！　イカせてぇぇっっっ！　お乳出したいのぉぉぉっっ！）
すぐ眼前では、愛するご主人様が汁まみれの爆乳にしゃぶりつき、一心不乱に弾ける牝果実の弱点を弄っている。
少年のあどけない表情が、快楽を貪る牡のものへと変貌し、牝の臭い立つ搾乳の快感に打ち震えていた。
全身から湧き出る甘酸っぱい臭いだけでもうイッてしまいそうなほど、彼女の神経は磨り減って、絶望の先にある快楽を求めていた。
（な、なんで……ご主人様は気持ちよさそうなのぉっっ⁉　わ、わらひ、頑張ってるのに……こんなに我慢してるのにいいいっっ！）
彼は悪くない。悪いのは不甲斐ない自分のせいだ。それはわかっている。けれど――。
「あひ……イクッッ！　ああ、イケな……んああっっっ！　お、おおおおっっ！　おほおおおおっっっ！」
ビブシュゥ……。
これで三十回目の不発射乳だ。すでに身体中の筋肉が緩み、ありとあらゆる穴から淫靡

な汁が出しっぱなしになっているにもかかわらず、胸だけが出ない。出せない。
「ひぐっっ！　ご主人……様ぁぁっっ！　ああ……んぎっ、んほおおおおっっっ！」
またイケない絶頂が、黒髪のメイドの理性を削っていく。
「かなりキテるなぁっ！　尻の中までいい感じにグチュグチュになってきやがったぜ……ケヒ、イケよ牝豚ぁあっっ！　思いきり狂っちまいなっ！」
「ひぎぃぃぃぃぃぃぃぃっっっ！」
使い魔に散々突き崩された腸肉が、うねる触手コードによって更に犯され蹂躙される。信じられない焦燥感と快感が熟れた肢体を、官能の沼地へと引きずり込む。
ビブチャァァッッッ！
「お、おおおっっっ！　潮、オ、オマ〇コぉおおおっっ！　も、もうダメ……胸ダメ……タクヤ様……ごめんらはひ……薫、薫は……ご主人様ぁぁああっっ！」
ネットリとした牝汁を股間から噴出しながら、犯され弄ばれるだけの性奴隷メイド――もう彼女の理性の軋みは、とっくに限界を超えていた。
「ご、ご主人様ぁぁっ……ごめんなさいぃぃ……もう無理、なんです……ぅぅっ！　お乳出したいのぉおっっっ！　イ、イキたい……ですっ！　くああっっ！　許してくりゃはひぃぃぃっっっ！」
女の情欲が一気に破裂し、想いも誓いも吹き飛ばす。

フルフルと震える薫の指から力が抜けたとき、彼女は信じられないほど高く飛翔した。
「ひぎゅおおおおっっっっ！　おおおっっ！　イクッッッ！　イッグゥゥゥッッッ！　ほおおっっ、ぎもぢいいっっっ！　あへぁぁっ、ごしゅひんひゃまぁぁっっっ！　ああっっ、ごひゅひんひゃまぁっっっっ！　イクッ！　イックッッ！　イグゥゥッッ！」
ブベシャァァアッッッッッッ！　ブボォゥゥゥッッッ！　ビシャァァアッッッ！
肉鞠のような牝脂肪に凝縮された快楽乳液が、二つ同時に噴出し躍った。まるで乳房全体が蕩けて、消えてしまうかのような甘い感覚に酔いしれる。
「あはぁっっっ！　イクイクッッ！　んああっっ！　消えるっっ！　あらひ、きもぢよひゅひて、どっかイッひゃうっっっ！　う、お、お、おおおおっっっ、ひきゅぅぅぅっっ！」
艶かしい肉体が、やっと訪れた射乳絶頂の快楽に打ち震える。
下半身が狂ったように痙攣し、股間からブシュブシュとネットリとした牝蜜が噴射される。
（おお、気持ぢイイイッッッ！　おっぱい噴くのぉぉぉっっ！　）
恍惚の表情に浸る黒髪のメイド。揺れるカチューシャが崩れ落ち、アップにまとめたロングヘアーが、露になる。
「か、薫ぅぅぅっっ……僕、もう……っ」
快感に酔っているメイドの前で、少年がおずおずと自らの股間を見せつけた。見ればそ

こにははっきりとわかる牡の膨らみが確認できた。
少年も、つい先ほどまでの薫と同様に我慢に堪えかねたような顔をして、こちらを見つめている。
「……わ、わかりました……ご主人様ぁ……薫が、精一杯ご奉仕いたしますぅぅぅっっ！」
「あ、あひ……おおおっっ……⁉　おほ……んお、おおおおっっっ！」
女の官能を余さずぶちまける半脱ぎメイド服を纏った薫が、もう何度目かの絶頂嬌声を張り上げた。
すでに辺りが夕闇に落ちきった時間、一匹の牡に正常位でくみしだかれ、美麗の退魔メイドは、熟れて張り詰めた女体を駆け巡る快感の淫撃に、身も心も委ねてしまっていた。
「ひ、ひぁああっっ！　タクヤ様ぁぁっっ！　突いてっっ！　もっとっっ！　んおおおっっ、お、ぉ奥までぇぇっっ……タクヤ様のぉっ……ぶっといおチンポで、このはしたないメイドを狂わせてくださいぃぃぃっっ！」
「薫、出すよっっ！　ふふっ、最高だよ薫のマ〇コ！　僕、ずっと気持ちよくなれるよ！　薫はどう⁉　ねぇっ、気持ちいい？　んくっっ、うあ……出るっっ！　イクッッッ！　うあああっっ！」
ズビチュアァァァッッッ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/